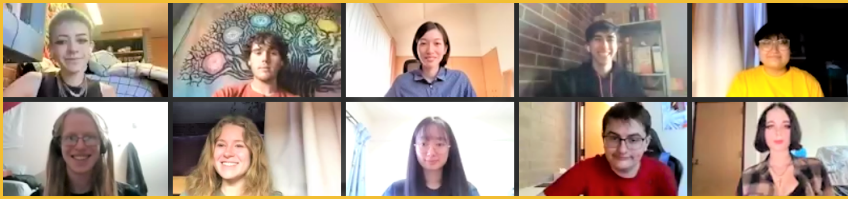


# NU-COIL LETTER

POWER OF COLLABORATION

VOL.7



藤掛 千絵 Chie Fujikake



Vol. 4の中では、特に時差のある海外の学生との協働におけるミスコミュニケーションについて触れました。時差だけでなく、国の習慣や価値観の違いから、大なり小なりカルチャーショックを感じることもあると思います。PBL COIL Aの授業で参考図書にしている、エリン・メイヤー(2015)『異文化理解力』英治出版の中で述べられている

## 「大文字の決断」と「小文字の決断」

について理解をすると、学生だけでなく大人同士でも、違和感の原因が何かを冷静に見つめ、異業種の担当者や海外の先生との連携や関係が上手くいくヒントになるのではと思うので、今回は私の視点で少し紹介したいと思います。

私がアメリカに滞在を始めて間もない時、友人に「今週の土曜は午前中から近くへハイキングに行こう」と言われました。「いいよ」と返事をした私は、その心づもりで2~3日を過ごしました。この時点で、私にとってそれは「約束」でした。当日の朝、その友人の所へ行ったときに「今日はちょっと寒いね」と軽く挨拶代わりに言うと、「あ、寒いならやめて映画でも観に行く？」と言われました。

「約束したからそれ通りに動く」のを期待するのは、「大文字の決断」が習慣づいている人や組織の傾向で、「物事は流動的だから柔軟に判断する」のは「小文字の決断」が習慣づいている人や組織の傾向です。

「え、ハイキングするって言ったのになんで...」が、その当時の私の正直な違和感でした。ただその後の生活で、確かに日本よりもそういう場面が日常的に多く、次第に「まあいいか。そういうもんか。」と受け入れ、予定変更にあまり抵抗がなくなっていました。

もちろん、重要な事や大きな計画については、それ相応の準備や周囲の協力も必要だったりするので、一週間ごとにコロコロと方針が変われば不信感を買ってしまうでしょう。ただ、調整可能なことや、冷静に考えたらそこまでこだわらなくても良いこと、またその時々状況によって、むしろ変えたほうが全体のために良いことなどについては、「小文字の決断」を何度も繰り返していくことで、本来の目的を、その時の状況に合った一番良い形で達成できるように思います。

連携やその継続は単純ではありませんが、相手との違いに優劣をつけず、まずは「違い」としてありのままを眺め、捉えてみることはないかと個人的には思っています。